

Title	アリストテレス,アヴィセンナ,トマス・アキナスの「靈魂論」比較研究
Sub Title	Etude comparative de la psychologie d'Aristote, d'Avicenne et de St. Thomas d'Aquin
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1970
Jtitle	哲學 No.55 (1970. 3) ,p.227- 236
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	博士學位論文審査の結果の要旨
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000055-0227">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000055-0227</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《 博士學位論文審査の結果の要旨 》

# Étude comparative de la psychologie d'Aristote, d'Avicenne et de saint Thomas d'Aquin

(アリストテレス, アヴィセンナ, トマス・  
アキナスの「靈魂論」比較研究)

牛 田 徳 子

## 内 容 の 要 旨

これはギリシャ古典期, イスラム中世期, ヨーロッパ中世期においてそれぞれ体系的哲学を大成したアリストテレス, アヴィセンナ, トマス・アキナス靈魂論 (デ・アニマ) の原典を中心として, その理論構造の批判的比較を試みたものである。即ち原文の記述の理論的再編成とその比較, 主要概念の内包の分析とその比較, 原作者の追求した諸問題の批判的及び発展的解釈, 以上を行うことによって原作者の靈魂思想の比較とその思想を支える彼等の哲学的立場及び源泉を探ること, 以上が本論文の趣旨を構成している。

三者が異った時代の異った文化圏の人々であるにも拘らず一つの共通な哲学思想圏に属していることは比較研究にとって好都合な学問的方法論を提供してくれる。それは同時にこの比較論が哲学の一般領域の中にとどまるということを意味している。即ち形態面からいえば三者は極めて多くの場合共通な哲学的名辞を使用している。しかしもっと重要なことは内容面からいって三者の靈魂論が一つの共通な基礎理論——即ち質料形相論——を前提としていることである。アリストテレスがこの基礎理論に基いて靈

魂を物体の現実態（エンテレケイア）と一般的に定義して以来靈魂概念はそのプラトンの性格を脱して合理的な哲学的科学的対象になり得たのである。アヴィセンナとトマスの靈魂論もこの事実を出発点としている。従ってわれわれは三者の理論において靈魂の質料形相論的概念がどの程度有効でありうるかを常に問うことによってそれを比較論の方法としたのである。

以上の趣旨と方法に従ってわれわれは 1. 靈魂の一般理論 2. 靈魂の特殊理論（植物靈魂，動物靈魂，人間靈魂の各論） 3. 生命機能論（植物機能，意欲運動，感覚，知性認識の各論）に係わる三者の記述を検討し，そこから或程度の結論を導き出すに至った。アリストテレスの靈魂論においては彼の自然学的立場と経験論的傾向は彼の質料形相論と結びついていけばその実証的役目を果している。即ち生命物の本質構造の質料形相論的演繹と生命現象の経験的観測の帰納とから彼は下から上への発展的生命の秩序と極めて進歩的な靈魂の概念を得るのに成功した。しかし人間の理性については彼の靈魂の一般的構造論に組入れることは理論的に充分可能ではあっても尚観念論的な解釈を許す可能性を残している。アヴィセンナにおいては彼が受入れたところのネオ・プラトニズムの形而上学とアリストテレス的な自然観とを靈魂構造において如何に両立せしめるかが特徴となる。その結果自然界の最も完全な靈魂（即ち人間靈魂）を英知界の最後の理性実体と同質視することによってすべての自然靈魂の系列を上から下への観念論的な系列に一元化し，従って彼の質料形相論はここで大きく後退することになった。他方彼の科学的な経験主義は観念論的な精神主義と両立し，自然科学と自然哲学の分裂を予示する近代主義の先驅を想像させる。最後にトマスは靈魂概念の質料形相論的性格への復帰を試みるのみならず人間の理性問題をこの枠の内に理論付けることでアリストテリズムの極めて大きな可能性を示したと云ってよい。しかしながら彼の質料形相論は形相因に過大な重点をおくことによって微妙な観念論的要素を導入し，

彼の靈魂概念にはアリストテレスのそれよりもアヴィセンナのそれに類似されるべき構造が見出される。これは彼の哲学がネオ・プラトニズムの先験的傾向を完全に脱し切れなかった証拠とみてよく、事実彼の記述にはアリストテレスにおけるような質料形相論と自然学的経験論の見事な結びつきが見当たらないのである。

### 論文審査の要旨

Étude comparative de la psychologie d'Aristote,  
d'Avicenne et de St. Thomas d'Aquin

(アリストテレス, アヴィセンナ, トマス・  
アキナスの「靈魂論」の比較研究)

牛田徳子君提出の本論文は、アリストテレス (B C. 384—322) とアヴィセンナ (980—1037) とトマス・アキナス (1225—1274) の「靈魂論」De anima を各々の原典に即して比較研究したものである。使用された原典はアリストテレス, De anima, Oxford classical texts, London, 1959, アヴィセンナ, Avicenna's De Anima, being the Psychological Part of Kitāb al-Shifā, ed. by F. Rahman, London, 1952 及び Kitāb al-najāt, éd. par Muḥy al-Dīn al-Kurdi, le Caire, 1938 及び Aḥwāl al-nafs, éd. par Fu'ād al-Ahwānī, le Caire, 1952, トマス・アキナス, Summa Theologica, Marietti, Roma, 1952; Quaestio disputata de anima, Marietti, Roma, 1949; In Aristotelis librum de anima commentarium, Marietti, Roma, 1959 などである。「靈魂論」は元来アリストテレスがその「<sup>デ・フニマ</sup>自然学」<sup>フニジカ</sup>「<sup>メタ・フニジカ</sup>形而上学」と並んで著述したものであり、アヴィセンナもトマス・アキナスも専らアリストテレス原典の注解者として同じこの問題にとりくんでいるが、本論文の著者が特に比較の対象としてこの二人をとりあげたのも、両者が注解の名の下に各々に固有の独自の学説を展開しているからに

他ならぬ。けだしアヴィセンナは中世イスラム哲学の体系組織者であり、トマス・アキナスは中世キリスト教哲学の体系組織者である。従って本研究がギリシャの古典哲学と、その流れを汲むものながら各々に独自の性格を有するところの中世のアラビア哲学と中世スコラ哲学との三者を相互に比較するという、まことに広汎な研究主題の一部であることは云うまでもない。本論文はつぎのような内容からなる。

## 序 論

1. 出 発 点
2. 靈魂論の哲学体系に於ける位置
3. 靈魂論の方法

## 第1部 靈 魂 一 般 論

- 第1章 アリストテレスによる靈魂に関する一般定義
- 第2章 アヴィセンナの一般靈魂概念
- 第3章 トマス・アキナスの一般靈魂の本質
- 第4章 結 論

## 第2部 靈 魂 各 論

- 第1章 自然秩序に於ける靈魂の分類
- 第2章 植物靈魂
- 第3章 動物靈魂
- 第4章 人間靈魂
  1. アリストテレスによる人間靈魂
  2. アヴィセンナによる人間靈魂
  3. トマス・アキナスによる人間靈魂
  4. 結 論

## 第3部 生 命 機 能 論

- 第1章 生命機能の分類
- 第2章 植物機能

1. 栄養機能

2. 成長機能

3. 生殖機能

第3章 意欲的運動機能

第4章 感覚機能

1. 感覚機能の構造

2. 評価能力—感覚に於ける真偽—感覚的反省

第5章 理性機能

1. 普遍者の抽象—単純知解と複合知解

2. 理性の完成段階

結 論

序論に於いて著者は、アリストテレス、アヴィセンナ、トマス・アクィナスなど当時の哲学者達にとって「靈魂論」は經驗的事実から出発する学問で、それ自身認識論的な問題を提起するものでなかったこと、特にアリストテレスに於いてはそれは広義の「自然学」に属するとされること、またアヴィセンナ、トマス・アクィナスではそれと同時に「神学」や「形而上学」の予備学とされていたことを指摘し、結局、両者がアリストテレスの質料・形相論にどの程度忠実であるかを検討することが、この比較研究にとって重要であると主張する。

第1部「靈魂一般論」では植物・動物・人間など一切の生命体の原理としての靈魂の三哲学者に於ける定義が比較される。アリストテレスでは理性靈魂も含めて一切の靈魂は自然的物体の形相因としてその第一現実態となり、更にその生命体の第二現実態にとって靈魂は機動因、目的因ともなる。アヴィセンナでは靈魂は自然的物体に対してはむしろ実体的であり、特に理性的靈魂は目的因として<sup>カマール</sup>完成因と呼ばれ、決して内在的な形相因とはなりえない。

トマス・アキナスは霊魂はアリストテレスと同様、形相因として質料に内在し、その第一現実態となるが、しかし基体たる質料を「第一質料」とする彼独特の質料論によって結果的にはアヴィセンナの目的論的な霊魂観に近づくとされる。

第2部「霊魂各論」では植物・動物・人間の各段階に固有な霊魂が扱われるが、総括的にみてアリストテレスでは「自然は飛躍せず」の原則に従い、下から上への自然学的な発展段階が辿られ、アヴィセンナでは新プラトン主義的な発出理論に従い上から下への形而上学的展開が辿られる。けだし一方ではアリストテレスの質料・形相の重畳理論に従い、下部領域の形相が上部領域の質料的基体として積極的に上部領域の形相を制限するが、他方では新プラトン主義の欠除理論に従い質料がただ消極的に上部領域の形相を頽落させることによってこのことが起るといのである。そしてトマス・アキナスはこのような発出理論には従わなかったが、しかしアリストテレス自身の自然学的意図を十分に理解しているともいえないのである。

さて、アリストテレスによると植物霊魂の第一現実態にもとづく本性上の定義は栄養性であり、第二現実態にもとづく適性上の定義は繁殖性であり、成長性は両者の中間にある。アヴィセンナでは栄養性、成長性ばかりでなく、繁殖性までも本性上の定義に組込まれ、トマス・アキナスは繁殖性だけで植物霊魂の定義に充分であるとした。次に動物霊魂ではアリストテレスは触覚性を以て本性上の定義とし、その他の高級感覚性と運動性を適性上の定義に加え、アヴィセンナは感覚性と運動性を本性上の必要にして充分な定義とする。そしてトマス・アキナスの立場は両者の中間にあってあいまいである。

最後に人間霊魂についてアリストテレスは人間を理性的動物と考えたので、理性は身体の形相としてその第一現実態であることは確かであり、その意味で理性機能は身体固有の機能である感覚機能と密接に関連する。

しかし理性靈魂は必ずしも身体の第一現実態に限定されず、それ以上のものであって、この理性靈魂に固有の第一現実態を名付けて能動理性という。ところがこの理性靈魂の完成たる第二現実態に対しては第一現実態たる能動理性といえども可能態であって、これを可能理性という。そして能動理性の特に身体の第一現実態に該当する部分として上述したところの理性機能を受動理性となづけるが、この部分に関する限り、それは身体固有の機能とともに生じたり滅びたりするのである。アヴィセンナによると人間靈魂は形相として身体の第一現実態であることなく、それ自身、身体に外的な実体であり、身体の外的な完成因である。実践理性は特に身体を律し、その完成因となり、理論理性はもっぱら可能理性として、離存する神的な能動理性から流出する知的形相の受容器となり、自らを完成する。一般に理性靈魂は身体との偶有的な結合によって一時失われた自らの姿を身体の意識的支配と知的浄化とによって回復すべきであるとする。トマス・アキナスは再びアリストテレスの立場にもどって理性靈魂を身体の第一現実態とし、能動理性は身体の質料性格によって完全に個別化すると説く。しかし身体の形相である人間の理性靈魂のうちに元来、身体という質料的基体に属していた植物靈魂や動物靈魂の性格までも形相素質として吸収し、いわば近接質料たる質料的基体を空洞化する第一質料説を採ることによって些かアヴィセンナ理論の名残りをとどめているといつてよい。

第3部 生命機能論は各種靈魂についての經驗的記述から始まる。さて植物機能たる栄養作用、成長作用では個体の数量的拡張、また繁殖作用では種の時間的拡張が認められる。次に動物機能として意欲的運動機能があげられる。欲求と運動がここで問題になるが、アヴィセンナは両者の間に決断の介在をみとめ、自然的選択能力としての本能をみとめる。トマス・アキナスは事物の自然的傾向は内在的形相によるが、動物の運動傾向は感覚を通して対象の外在的形相によって規定されるという。アリストテレスはすでに動物の感覚機能に適不適の判別選択機能を帰しており、これに



よって個体及び種の空間的拡張が認められるとした。次に感覚機能として五感としての外官と、対象から切離された限りでの内官とがあり、アヴィセンナは特に後者について共通感覚・表象力・想像力・記憶力・評価力を掲げている。感覚は常に現象的であり、その限りに於いて常に真であるが、評価能力には明らかに真偽の可能性があり、その意味でアリストテレスは感覚そのにも一種の反省作用をみとめ、トマス・アキナスもそれになっている。しかしアヴィセンナは感覚に如何なる意味の反省もみとめないで、真偽の識別はもっぱら理性の機能に属すとする。

最後に理性機能に移るが、理性機能の主要なものは普遍者の感覚的表象からの抽象である。しかしアリストテレスの抽象作用の説明はいささか機械論的感覚主義的であったので、アヴィセンナはむしろそれと対立的な仕方、抽象作用とは普遍者が靈魂内の表象を機会原因として離存的な能動理性から流入してきたものと理解した。しかしトマス・アキナスは質料・形相論を展開して人間の能動理性は事物からの表象を自らの非質料的本性に同化せしめる第一原因であり、非質料化された事物の似像は今度は可能理性を自らに同化せしめる第二原因となると説く。かくてアヴィセンナでひとたび先験論に一転した抽象理論は再び経験論に復帰したのである。抽象的把握によって獲得された概念を結合分離する判断構成は真偽可能の蓋然命題を生みだすが、これは幾つかの自明的な原理命題から演繹的に論証されなくては<sup>エピステマ</sup>学的知識とはならない。この自明的な第一可知的な原理命題はトマス・アキナスに於いて最少限のアプリオリとも考えられるが、しかし、アリストテレスに従って彼もまたその経験的起源を認めている。

アリストテレスは人間理性の完成段階を三分し、純粋な可能態、可知物の<sup>ヘビトウス</sup>所有態、可知的理性の自己認識とした。アヴィセンナとトマス・アキナスではこの第二段階の所有態は第一可知的原理命題の獲得から始まるとするが、前者はそれを能動理性からのアプリオリの流入とし、後者はそれをもアポステリオリの抽象によるものとする。ところがアヴィセンナは更

にすすんで演繹推論の中概念のごとき第二可知概念すらも流入的直観に依倚すると考えるのである。かくて理性は推論の過程的ディスクルシヴな結論の集積を経過して遂に獲得理性という最後段階に到達するという。

理性にとって知識の獲得は可能態にあった理性の現実態化であり、その完全な終局は理性の完成であり、厳密にいうと完全な第二現実態化である。このような獲得的理性が自己認識であるといってもアヴィセンナとトマス・アキナスとでは若干ことなる。アヴィセンナでは獲得的理性に達したとき自らの本性が自体的に可知的になり、知るものと知られるものの差別のない完全な自己同一がなりたち、そこで自己認識が実現するという。トマス・アキナスでは人間理性はその本性上、即ち、存在することの完全な現実態にはなりえない。獲得的理性の完全な現実態とはあくまで知ることの、いわば第二現実態であって、決して本性上の純粹現実態を意味していない。従って人間靈魂の自己認識は他者の知的形相を通じて間接的にアポステリオリに遂行される他はないのである。それに反してアヴィセンナの自己認識は本性の神化に通じ、その背景に質料を超えたものに自他の区別を一切認めぬ新プラトン主義的な同一哲学が看取される。

「結論」に於いては著者は三者を比較して次のように述べる。アリストテレスの主要な立場は質料・形相論、自然主義、経験論である。彼の「靈魂論」は特に理性問題において明確でなく、時としてプラトンの観念論との十分な断絶がなされたとは思えないが、全体としてはこの立場に貫かれ、またそのように解釈できる。アヴィセンナは新プラトン主義を導入し、結果としてアリストテレスの自然学的靈魂論を観念的にモディファイすることになった。彼の自然科学者としての特徴ある経験主義はこの意図と矛盾しない限り発揮される。観念論と科学主義の共存、実証科学と自然哲学の分裂は近代主義の先駆である。トマス・アキナスは質料・形相論を展開することによってプラトニズムに対立するアリストテリズムの客観論の可能性を多大のものにした。しかし天使認識論における新プラトン主

義の採用（偽デュオニシウスの影響）、彼の質料・形相論に含まれている新プラトン主義的要素（アヴィセンナの影響）は、アリストテレスに忠実たらんとする彼の意図をしばしば裏切っている。しかしアリストテリズムへの彼の最大の功績は能動理性を人間靈魂に内在せしめたことであろう。これによって人間靈魂の質料・形相論的解明が可能になり、「靈魂論」が「自然学」のうちに再び市民権を回復する道が開かれたのである。

以上が本論文に於いて著者が主張せんとしたことの概略であるが、原典にもとづくこの種の比較研究は今までに例をみない。哲学史的素材を注解するというよりは体系論的に把握して大胆な比較を試み、三者の学説史的性格は可成明瞭に対比されていると考える。「靈魂論」のうちでも後世哲学史上論議を捲きおこした理性論についての「仮説解釈」については多くの未解決の問題がのこされており、多分に試論的性格を免れていないにしても、極めて独創的であることは注目し値いする。なおこの種の比較研究にとって「スコリオン」といわれているアリストテレス注釈者達の見解が参照されていないことは哲学史的研究としてはやや欠ける憾みなしとしないが、他日の研鑽に期待したい。

しかし原典による三者の比較というこの種の困難な課題にとりくんだ研究は、まことに前人未踏のもので、国内的にも国際的にも多くの反響を期待できると思われる。仍って本研究は文学博士（慶應義塾大学）の学位授与に充分値いすると考える。

主査	慶應義塾大学教授	文学博士	哲学
		松本	正夫
副査	同	倫理学	
		宮崎	友愛
同	同	文学博士	言語学
		井筒	俊彦